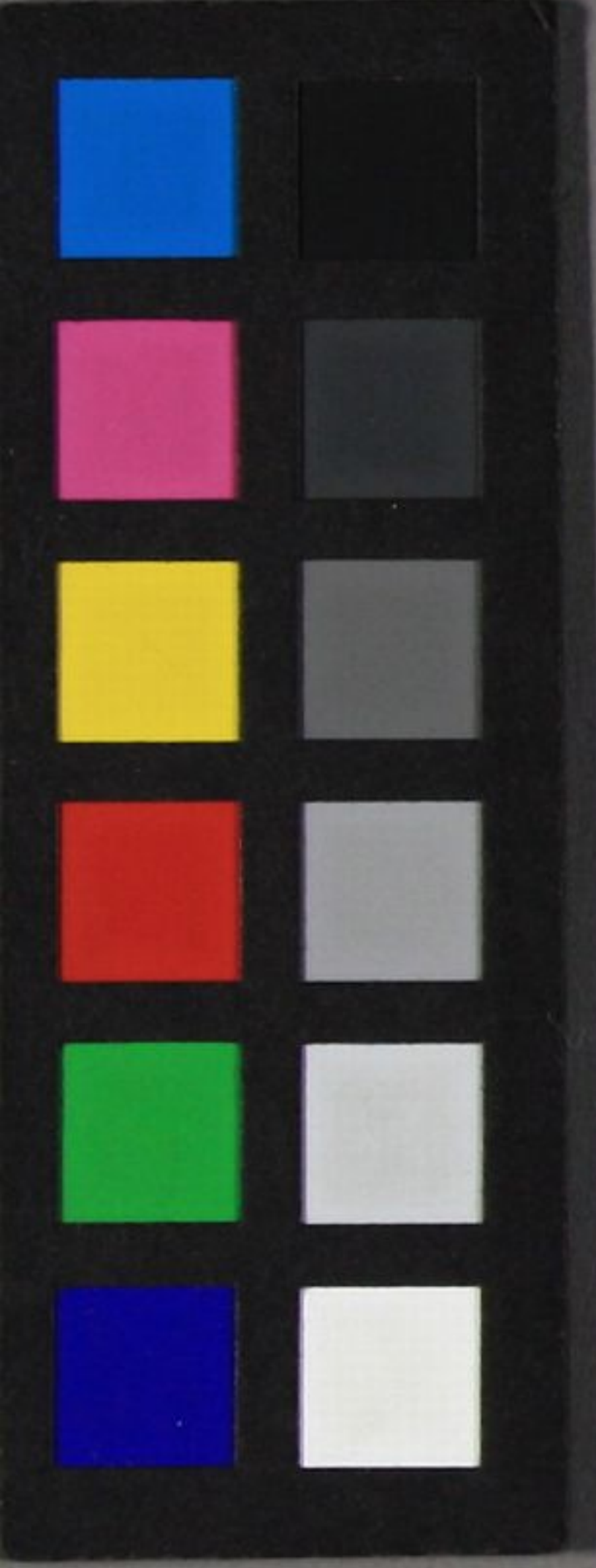


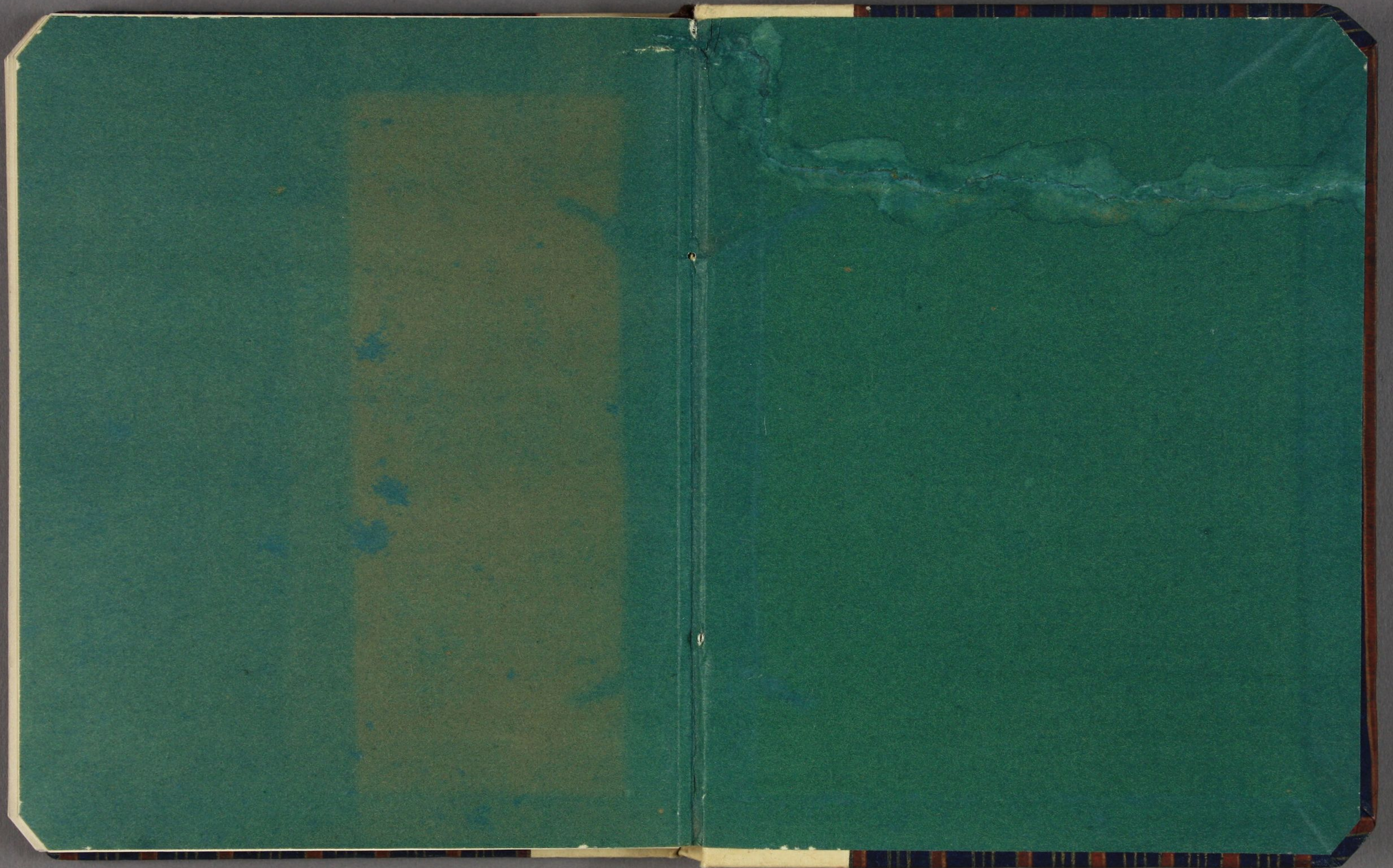
食後の唄

木下奎太郎



木下空太郎著
食後の唄





木下 大郎著

詩集

食後の唄



序

世に奇異なるは『南蠻寺門前』『ドウバンの作者』『硝子問屋』の作者、而して『緑金暮春調』『食後の歌』の詩人、わが友木下奎太郎の若き日の行状であつた。

彼は彼の身邊を修飾するに一見質實にして訥朴な黒鍔廣帽子に黒の背廣とを以てしたに過ぎなかつた。時としてはまた黒に金釦の大學々生の制服さへ着けて拮据としてゐた。彼は常に陰愁に満ち、氣六つかしく、齟齬にして謹直、また倏ちに顔を赤める處女の恥羞をさへ感ぜしめた。

○ 彼の服装はかくのごとく黒く、而も亦訥朴ではあつたが、彼の

脳漿は全く三角稜の多彩、彼自ら謂ふ所の萬華鏡の複雑光で變幻極りなかつた。聲色香味觸、是等悦喜す可き官感の種々相に於て、彼は全く、初めて碧眼紅毛の邪宗僧を迎へた長崎青年のそれらの如く、時としてはまた初めて此の浮世繪の日本に面接した西域人のそれらの如く、事毎に驚異し、瞠目し、仰視し、鑑賞し、遂には彼自らをその恍惚無礙の極樂世界に魔睡せむとさへ欲するに到つた。

然し乍ら、茲に考ふべきは彼は此く魔睡し陶醉せむと欲したにかゝはらず、彼は彼自身を遂にはその沈酒の底に見出さねばならなかつたほどの其の官感の幻法から、不思議にも自ら惑亂せられない聰明と理義との保持者であつた。彼はこれら鳩毒の耽美者發見者ではあつたが、彼自らを決してその鳩毒の爲め

に殺す癡愚と溺没とを敢て爲なかつた。おお、此の七彩陸離たる不可思議國の風光の中に在つて、常に黙々として手に太き洋杖を握りつゝ徘徊する長身黒服の異相者、彼木下奎太郎の澁面を見よ。

○

無論、彼にはその幼時よりかの不可思議國に對する熱烈なる思慕と憧憬とがあつた。彼は常にその發見者としてその熱意と歡喜と矜驕とを以て、絶えず探索し涉獵した。かくして彼はたゞ轉々として彷徨し漫歩した。時によりては調子はづれの焦燥と亢奮とが、決して彼をその一點に執念く佇立させては置かなかつたほど。だが、かゝる刹那に於てすらも、彼内面の眞實はまた絶えず暗い寂しい人面痘の如く彼が肉身について離れ

なかつたのである。

○

彼は種々の舶來品——それは珍奇なる多種多様のエチケツテ、南蠻の異聞、ギヤマン、香料、異酒、奇鳥、更紗の類——を吾徒の間に齎らした。のみならず、彼はまた絶えず、その特殊な紅毛舶來の感覺を以て、新様の日本、油繪の江戸、銅版の長崎、メヅサの小土佐、薄荷酒中の鎗さび、西班牙外套の花の昇菊を發見し諦聽した。あまつさへ彼は、清親の錦繪の中に所謂文明開化のモンマルトルの酒舗を漁り、紅提灯と紙の櫻のかげに、かの阿蘭陀のラベイカ彈きの如く、椅子の上にロチの女を乗せ、而してしみじみと夜の三味線を爪ぐらせた。

彼は比類稀な詩境の發見者であつた。だが惜しい事にはあ

序

まりにその効果を整理爲ようとしなかつた。彼の逐次の新發見は殆ど目まぐるしいばかりであつた。だが彼はたゞ前へ前へと前進するばかりであつた。だから彼の背後には、常に勿體ない程複雑は複雑の儘に、美は美の儘にただ燦々爛々と取り散らされてあつた。

序

たとへて云へば、彼は驕奢と眩耀とに燃え狂つた珍草奇木の間を、金弧を描く一羽の斑猫光の如く、それからそれへと花粉にまみれてまた未見の新世界へと飛び去つて了ふのであつた。だが、彼が佛蘭西近代詩苑に於ける鬼才オラムボオの如き驚くべき官感的發見者であり、同じくその收收家で無かつたとしても、それは却て彼の詩人としての獨自性優越性を證左するものに外ならぬ。

再び云ふ。世にも奇異なるはわが友木下奎太郎の若き日の行跡であつた。彼はまことに極祕境の憧憬者であり、最も進むだ美の探検者ではあつたが、遂に彼自身は邪宗の法皇に六年の長日月を奉仕して遂に清浄な個の童貞として老いて了つた、支倉六右衛門の如く、結局謹嚴な淨身の童貞として、彼は彼自らの青春の初期を空にして了つた。

麗明にして柑子實る異國趣味の海港に生れ、西域文明の教養と官感とを修練し來つた彼が如き青年と、もともと長崎の近海に生れ、かの阿蘭陀藝術の餘香に直接薰染して育つた邪宗系のトンカジョン予が如きとが、その當時一見して共鳴し感激し歡

喜し合つた事は當然であつた。予等は無論互に刺戟し合ひ、影響し合ひ、熱狂し合つた。

予等が狂飈時代はかくして豪華であつた。Panの盛宴はかくしてのその驕奢の絶頂に達した。

彼が詩の本領は主として『綠金暮春調』に於て見る可きである。然し乍ら、彼の小吟竹枝の類に於ても彼が特性は燦然としてその餘光を放つてゐる。殊に此の卷末の「よるよるは」「夜ふけには」の數章の如き、恐らく『松の葉』以來の名吟であらう。而も彼が各種の詩に於て未だ見ぬ、單純化の妙味は、遂に複雑の複雑に了らぬ彼の今後の詩境を暗示して餘ある。

彼、わが友、木下奎太郎、健在なりや。

大正八年十月

相州木兔の家にて

北原白秋

序

8

序

序

今予は此小冊子を刊行しようとして、心に慚ぢて躊躇する。予がわかき日の酔はもう全く醒めてしまつて、その時の歌には、唯空虚な騷擾の迹と、放逸な饒舌の響とが残つてゐるのみであるのを知るからである。その歡喜も、その悲愁も、殆どただ心の外膜に洵き現はれ、波紋を畫き、響を立て、亂れ、またちりぢりに散り失せたる、氣まぐれな情緒に過ぎないし、その格調にしても——さう云ふ内容を、その時の場あたりの調子と言葉とで寫したもののゆゑに——今から顧みて顔を擧めるほどの鄙さがある。ああ、ああ、過去と云ふものの、外看上豊饒であつた蓄積は一體どこに消えて行つてしまつたのか。幕が締まる。音楽が止む。

1

——そして今までの緊張とは裏はらに、頓と馬鹿らしいと云つたやうな、軽い腹立しさが心に残る。過去は畢竟幕の締まつた舞臺だ。あんまり弄いぢらないで、無くなるものなら無くならしてしまふが可い。

と云つたわけで、此原稿も、ちやんと整理してから、三四年も打つちやつて置いた。夫でもまだ整理に着手した當坐には、九月末の雑草の花めく、それらの一つ一つに、愛執の心の繋がつて居ないのでなかつた。別れて一年とはならぬ女の記憶ほどに。さてさて此集に收めた詩の中には、其製作年代の尤も早きに遡れば、とうに十年の昔になつたものもある。その時分の心が今ほど硬ばり、しやちこ張つて居らなかつたつてことは分り切つて居る。

始めて此集の整理に取り掛つた時でさへ、それは詳しく言へば千九百十五年のことであるが、もう幾分自分の心臓に石灰かなんぞが溜つたことは自覺せられた。その時は本郷は西片町と云ふものの、唐橋下の溝のそばの家の二階にせせこましく、ごろごろと燻ぶつて居たのであるが——ほんとに燻ると云ふのは誇張の修辭ではない、隣に銅像かなどを作る家があつて、時々夜藁を燃やして、その煙が壁の隙間を這入つて、予を煙攻めにした。予は冬の寒い晩でも、さう云ふ時には、雨戸をすつかり明け放つて、ぶつぶつ言ひながら嚏をした——然しそれでも窓から見ゆる隣の鳥屋の庭は廣く、溝に沿うて葡萄棚があり、夏初めの三更の月が、その一つ一つの房に水銀を流したりなんぞすることもある。またわが室の破れ硝子がらすに地圖でのやうな川を

書きもした。

「月かげは窓のがらすの一つの鱗をさへきらきらと銀色に光らせた。故もなく湧き出でたる今宵の悲哀は、過ぎし日の、雑草の花に似る薄情をも、いとどいとどしきものに思はせた。」

とさう予はその時、過去を傷む心をもて、一片の小さい紙の上
に書き散した。

序

お釋迦さまの弟子たちなら、また孔子様の信者たちとしても、
かう云ふ根もない情動の泉に浸ることを、飛んだ邪見として輕
じもするだらう。それを反省もしないで、何か香料か、旨い味の
やうに、ひたすらに弄ぶ人をば卑しきもするだらう。予とても
亦それは知つてゐる。だが佳い土耳古の葉の紙巻を飲んだあ
とに、人さし指に残るやさしい臭を懐しむことを知る人もあつ

て欲しい。歇斯的里亞の素質をもつて、鬱陶しい青年期を送つ
た經驗のある人でなければ、世の中のこんな亞爾可兒劑の眞味
を解することが出来ぬ。

予が「食後の歌」の如きは、孰れもこの種の、やや有害な、然しさし
たる毒もない、魔睡藥の類である。

千九百十年は我々の最も得意の時代であつた。「パンの會」は
毎週開かれた。我々は Rodin の銅像の首の唇に寄せた皺の粘
さが何う云ふ情を藏くしてゐるかが分るほどになつた。また
亞刺比亞物語や、近松、三馬などに出て來る青年の心に同情を寄
するほどの苦勞も覺えた頃である。毎日同じ仲間と交遊して、
作詩し、作劇してて日を暮した。予は劇の形式を以て印度の太
子の心に洵いた、解け難き苦患を訴ふると同時に、小さい歌曲を

以て、如何に東京の五月の美しく、舶來の酒の香しきかを歌つた。屋上庭園第二號の發賣禁止を食つたのも此年である。

そのころ日本橋も小網町のほとりに鴻の巢と云ふ酒場が出来た。まづまづ東京最初の Ogle と云つても可い家で、その若い主人は江州者ながら、西洋にも渡り、世間が廣く、道樂氣もある氣さくな亭主であつた。亭主は Conquerille の漁人ならぬ我々に如何に Curacao の精神を快活にし、如何に Cyp の人の心を激怒せしむるかを教へた上に、「まづ酒杯の形にもいろいろあります。それを一つお目に掛けませう」と云つて小さい該里ので、赤蒲萄杯、白蒲萄杯、無足杯、鷄尾杯、璃球兒杯の數々を示説した。それは冬の夜のこと、華奢な火爐には緑色の、えなめるの花が光り、外

物語る夜樂の通らうといふ時であつた。そこで予は乃ち立るに一曲を作つて主人に贈つた。

「冬の夜の 暖爐の

湯のたぎる静けさ……」

に始まる該里酒の歌がそれである。

それからとりどりに「金粉酒」菊正宗(兩國)「薄荷酒」等を作つた。油繪で復寫した江戸錦繪のやうな、Pierre Loti の Chrysanthème のやうな、さう云ふ不純な氣分を愛する予は、寄席のかへり、芝居のかへり、また常盤木俱樂部、植木店のかへりみちに、この種の異香の酒を嘗めて、かの卑しい、然し涙に満ちた、江戸平民藝術の聯想に耽ることを楽しみにした。

その時分の予の頭はまるで萬華鏡のやうにどたどたしてゐる

た。乃至は此の午後の雑草園の如く、鬱蒼として錯雑してゐた。予は「道」に親まず、「學」に離れ、全く精神上の浪費者であつた。

紅玻璃燈の下に、重く光る液體を充したる小高脚杯を前に置いて、予は予の前の中に擾亂する亞刺比亞夜話の復活を諦視した。その中には鯉の切身を持つて立つ大屋、中央亞細亞の庫車から出たと云ふ塑像の佛頭、傳問答師作の阿修羅の首、乃至それよりも美しい豊竹昇菊の頬、中村兒太郎の外郎賣、松尾のどんつく、小登良の鎗さび、古渡更紗のすれずれの唐艸、また檜古、杏仁の實の味などか、歌の如く、螢の如く、初夏の雹の如く、山羊の叫喚の如く、汽船の後に残る白浪の如く、洶湧し、卷舒し、回轉し、出沒して狂奔した。

さう云ふ怠惰の生活の心に投げた悲哀は、凡て是れ「食後の歌」

序

の基本情調である。年代は忘れもしない、千九百十年、十一年乃至十二年のころである。

*

「町の小唄」はそれよりも少し早いころ、と云つてもまづ千九百十年ごろの戯作である。まだ日のあるうちから、まるで八月の雑草の中の落花生の花のやうに、青い夕方の雰圍氣の中にほのぼのと黄ろく光り出す永代橋の瓦斯燈にしても、また赤い斜日を浴びながら河岸通りを流して通る藥屋の歌にしても、凡て東京の——下町の色、音、響は、孰れも不可思議の情緒に染まつて居る。寫生帖を携へて、中野の原や、田端になんぞには向はずに、小網町、深川の河岸河岸を歩き廻つた、まだうら若かつた頃の作者には、赤い煉瓦の官廳や、びかびか眞鍮の光る銀行のかけに、歌澤

序

や、新内の「悪の華」が、そんなにも萎れないで咲いてゐるのを見るのが、この上もない興味であつた。大學の教授たちが、黒のフロッコオトで孔子誕生祭をする。そして戸の外は新内が流してゆく。予はこんな變てこな對照で混雜してゐる時代を、假に「不可思議國」とは名付けた。無論輕蔑の意味なんぞは少しもないのである。丁度、Series chaudes 中の不思議な詩句を興がると同じ心持だ。當時どこへ行つても東京は普請中で、眼鏡橋の下からは、律動的に、ぼつぼつと、白煙が、すさまじい勢で煙突から昇つてゐた。

さう云ふ情緒も又無論同時の詩的氣稟から見逃されてはゐなかつた。新に西洋から歸つた洋畫家の中には、まだ人の瞳が青く見える習慣のまままで、お酌の踊を畫かうとするのもあつた

が、我々はその中でも、蒲原有明氏の「朝なり」から大なる感奮を受けた。無論そんなしやれた心持は少しも分らないで、おしめや下宿屋での月末の心配を記述する、牛込邊の文士團體もあるにはあつたが、然し一方にはまだ聽いたこともない Debussy を評論する、出過ぎた批評家もあつた。

街頭の張札おひししを愛し、料理屋の色紙の印刷を愛し、モンマルトル畫家の漫畫を愛し、時花唄はかりうた、竹枝、Chanson de la rue を愛するを知つた予が、こいつを一番小唄でやらうと考へさせたのは悪い思ひ付きであつた。當時小傳馬町の廣重、清親ばりの商家のまん中に、異様な對照をなして「三州屋」と云ふ西洋料理屋があつたが、是れは我々の屢「パンの會」を催した會場であつた。その頃倚子に腰をかけて三味線をひいた五郎丸、ひさ菊、お松つさんなどいつ

た女たちは、今はどこにどう四散してゐることやら。

それから後は、大河の朝暮の眺めを自由にすることが出来るといふわけから、深川は永代橋の畔の「永代亭」と云ふ汚い西洋料理屋を倶楽部の代用にした。ルンプと云ふ若い毛唐が、下士の正装をして、獨乙各地の方言の聲色を使つたりなどした。川一つ向うには小さな鳥屋があつて、頬に刀痕のある酒好きのおかみが居て、屢々我々の爲めに儲けぬきの實價で晩食を提供した。と角わかいと云ふことは、世の中を面白くさせるものであつた。わが「町の小唄」はそんな巷から材料を搜した。

東京街頭の風景を歌ふものも、亦同じ態度から發してゐる。

*

ここに集めたる「竹枝」のことに就ては餘り多くは言ふまい。

兎角擬古は氣障きざりになる。自分は得意でも他の人は顔を擧める。だが、多くの物好きものずきの人のやうに、予も亦、昔からの小唄の言葉、心持には甚だ深い愛執を持つてゐる。「松の葉」の縫箔もよごれたる帙の中から古い板本を取り出して、その蟲の食つた面おもてを翻せば、百年の小曲の一つ一つに、わりなくも涙が流れる。で一頃は——やはり千九百十一年、十二年のころだが——我々の仲間それらの形式から強い影響を受けた。誰れでもあのいかにも下町の老人らしい歌澤龍美太夫の口から出るいなせな「一こゑ」の中の「女ごころはさうぢやない」の「ぢや」の發音の藏する神祕不思議にして百年の痴情をにじましたる蘊蓄を驚嘆するものは、古からうが新しからうか、善からうか、悪からうが、日本歌曲のかう云ふ形式を珍重しないでは居られはしまい。

「叙情小吟」も亦や「竹枝」に似るものであるが、無論それがデカダンの傾向であるのは作者も知つてゐる。何なら飛ばして讀んで貰つて差支ない。

*

千九百十一年のころである。予は自分の職業と、自分の周囲とを厭ふ心に日に夜に苛まれたことがあつた。偶々獨乙の東洋美術研究家の——まだわかい學者が夫婦で日本へ來た。予は彼等に昵むにつけ、或る夜、自分が單身で歐羅巴に渡つて、その土地に有り附くことは出來ないものだらうかと相談をかけた見た。

「さうですなえ」と彼は答へた。

夫人は正直にそれは到底駄目だと卒直に答へた。だが一度

序

序

歸國してから返事はしようと思つた。それからまた年が経つて、劇道に關係のある一獨乙人が來た。彼は曰つた。Leipzigの東洋歴史の教授は日本人の助手を要するから、或は何か出來るかも知れないと。予は待つともなく彼等の返事を待つた。病院で宿直して、どうしても眠れない晩などには、また起き出して手紙を書いて見たりなどもした。

「いくたびか、海のあなたの

遠人に文書かむと思ひ、

いくたびか、海のあなたの

遠國に去らむと思ふ。

今宵また宿直の室に。」

戦争が始まつて五年になる。而して彼等は今果して何處に

居ることぞや。『教授の死んだことだけは、予は數年前、東京の新聞で知つた。』

*

Fritz Rumpf も亦獨乙の青年である。彼自らはルンブ・フリッツと書いた。

また支那音で「龍普」とも書いた。千九百九年の頃であつたか始めて日本へ渡つて來、その後一年間青島で兵役に就て、それが濟んでからまた日本に來た。伊上凡骨の、最も怠惰なる弟子であつたが、其畫く風俗畫は中々面白かつた。彼は皮肉でなかつた。それ故其當時の、人のわるい多くの日本の友だちの前に沈黙してゐた予も彼には、何でもかんでも話すことが出來た。我等は互に爾汝を以て相呼んだ。一緒に寄席にゆき、一しよに麥

序

酒を飲んだ。予の彼に贈つた「麥酒の歌」は、今どこを搜しても原稿が見つからない。それでも彼の名を此序文から除くことは忍びない。「麥酒の歌」の未定稿の鉛筆でべけを食つたところのみが、今や斷篇として残つてゐるばかりである。

序

「雨あとの濡れた柳の

陰の燈の緑色の寂しいことよ。

予は窓より市街の一角を眺めて、

厚い麥酒の杯を口にするとき

ふと心に浮ぶ。異國なるわが友 Fritz Rumpf

薄明の如きその回想の世界は

また夜であつた。雨が降つてた。彼の大きな西班牙外套に兩つの體を入れて燈の明き寄席を出て暗い道を歩いた。

故しらず予等の心は激してゐた。

美に對するこがれと、

世に對するうらみと、

多分さうであつた、心の澱は。

(Rumpfどこかで酒を飲まう。)予は曰つた、

(いいです、いいです。それ可いです。)彼は答へた。

(給仕、麥酒だ。)予等はどなつた。

或る小さい料理屋の卓につくや否や、
ねむたげなる給仕は會計臺から立ち、
その時も亦二つの大杯を運んで來た。

(Rumpfお前は異國の男だ、

然し Rumpfお前は熟くおれ達の心が分る。

それは『青年』に國籍がないからだ。

Rumpfまづ飲め、そして當てて見る、

何が一體この俺を近來こんなに惱ますかを。)

彼れ Rumpfは怪しく笑つた。

そしてその赤い顔に麥酒の大杯を運んだ。……」

壊れた活動寫眞のふいむのやうに、「麥酒の歌」の未完稿は此で終つてゐる。その後どれだけ長かつたか今は覺えてゐない。作詩の年號さへ、今はとんと分らないのである。

*

予の詩作は明治四十年、西曆千九百七十年に始まる。始めて新詩社の諸秀才の驥尾に附して、その高作を見るに及び、予は予の感情に對して新しい表現の窓を作るを識つたのである。今は手許に何等參考の書がないから之を詳記することが出来ない。が長田秀雄が屍體の海底に沈むを叙せるもの、平野萬里が酒の醸造を歌へるもの及び北原白秋の漂渺たる小曲の諸篇から多大の刺戟を受けたことを覺えてゐる。予は始めて「楳古棊」の歌

序

序

を作つた。予は之を淨書して、心臓の鼓動を忍びつつ、之を與謝野寛氏の許に送つた。翌年予は與謝野氏、平野、吉井、北原の諸兄と九州南部を旅行して、一種古風の異國趣味をそぞろにに多大の詩的感激を得ると同時に、容易く詩作する祕傳をもわが同行から偷んだのである。諸君が九州の港の魚屋の店頭に弔られたる章魚の足、または田舎町の理髮屋の、途方もなく大きな赤團扇から旅の即興を作るのはお手のものであつた。詩はこんなに樂々と作れると予は考へた。それからしやにむに詩作した。然し此期の作、殊に長崎、和蘭情調を歌へるものは、本集には收めない。他日若し「綠金暮春調」が刊作せられるやうなこともあつたら、是等の舊作も再び日の目を見ることがあらう。

そして千九百八年九年十年の間は、予の文學的努力の大部分

は詩作であつた。十一年以後は、他の形式の表現に最も多くの力を注ぐと共に、詩作は概して専ら市井の氣分に沈湎することに轉向した。

始め予の著書を刊行するや、その逐年の叢書たるべきを豫想して之に「地下一尺集」の名稱を與へた。此名は唯地下一尺の不思議だに、幾分予の之に觸るるを得ば本懐なりと思惟したのに原く。而してその最初の第一集こそは、實に上述の「綠金暮春調」であるべき筈であつた。が、予の疎懶なる、屢此書の刊行の機を失ひ、今日に至つて始めて地下一尺集の第五集として此「食後の歌」を公刊するを得るに至つたのである。固より事の此に到つたのは偏にアララギ同人、齋藤茂吉君、島木赤彦君及び光風館主、四海多實三君の多大なる同情の^{たまも}資である。予の衷心感謝に堪

序

へざる所である。而して既に説く所に明かなるが如く、此に収集したるは主として竹枝、小唄に類する小曲である。で予はまた已むを得ず始めの心の計劃を變じて、「綠金暮春調」の代りに此集を當時新詩社の先輩諸兄また「パン會」の諸友に献ずるのである。

序

*

前に記したるが如く、予は數年前、此集の整理を思ひ立つたころ既に「時」の經過に對する哀愁の情を感じた。で或る時はまたかう書き記したことがあつた。

「時といふもの程はかないものはない。この偉大なる事實を記するが爲めに、人は各種の空間的符號を用ゐる。だが若し人

が過ぎ去つた「時」に再び觸れたいと思ひながらその時の空間的
記念を尋ねると、大かたは昔の形は残つてはゐない。――
「さう云ふ悲哀に搏たれながら、予は靜かに、或る繁錯な巷の裡
に改築せられたる旗亭の露臺に、涼しい夏の夜のことである、一
杯の赤葡萄酒を飲んだ。」

また予は懷舊の悲歌を作つた。その一節は次のやうである。

「ああ『あの時』は已に過去圏内に入れり。

空氣は濃くおぼろかにして、

過去の薄明は遠し、

その時の人々の顔さへ、今は定かには見えず。

メドウサよ、メドウサよ、唄歌ふメドウサよ。

かく汝が名を呼ぶとき、兩手を高く擧げ、

序

越しかたの幻覺に見られる人の姿は覺ゆれども……

酔ひしれて肩車組み

夜半の道を馳りたる『從五位』はた健なりや。

紫の唇持ちし詩人は如何に。

異國の濃き放蕩のころ解せし

飴色の異人はた今いづくぞや。……

だが予がさう云ふ病的な「回想の悲哀」に耽つた時から、時は容
捨なく過ぎ去つて、更に三五年の星霜を閲した。

で、予が一昨年、職を支那も湖北の瀋陽の地に得て、胡砂を浴び、
胡笳を聴くやうになつて、今までの感情的雰圍氣から全く遠離
した時でさへも、またあの耳鳴りといふもののやうに、折々は昔

の夢が戻つて來ることもあつた。

その年の秋の或る日、予は吉林省に旅行した。縣城外の或る田舎で地名を尋ねたら、とんか、とんだと云ふ返事であつた。然しその如何の文字であるかは遂に知ることが出來なかつた。然し史記の匈奴傳をも想ひ出させるやうな、肅索たる荒蕪の平野の暮色を眺めてみると、不思議にも耳許に一種の曲調の幻覺を感じた。是れは疇昔の夜、松聲會に於て人の歌ふを聴いたる小曲の一節であつた。予は覺束なくも其幻覺を追つて自ら之を歌へば、故國の情の切々として洶湧するのをおぼえた。

「吉林省、吉林縣

吉林城外の、とんか屯

夕闇の原中に立つて薄墨の歌をうたへば、

序

薄墨の歌をうたへば涙ながるる。」

歸來予はこの即興を竹柏園のあるじの博士に書き送つた。

だがその後は予も漸く滿洲に慣れた。もう西域傳を讀んでも黃鶻の歌などに徃徊しなくなつた。そして渡滿以來は殆ど小曲の製作をも廢した。唯去年の秋だけは、滿月の日の宵月が餘りに良かったもので、つひつひ心を動かされた。用事あつて城内へ往つての歸りに、わざわざ廻り道をさせて、北陵へゆく途中の野原に出て、この廣大なる景色の上に出た中秋の月を楽しみつつ、ふと自らの心の限りなく寂しきを省みて、「待てしばし」と云つて馬車を停めた。

「今宵は中秋滿月、

夕闇のうちから月が出てゐる。

瀋陽の邊門の外、
貧しい家からも樂の音が聞える。

等一會！ 馬夫、馬を停めろ、

おれは忘れものをした——何か落した。

だがそれは前の辻ではないぞ。

もつと前だ、前だ……どつか心の隅だ。

——何時であつたか、

おれは何か思つて、それを忘れて、

今までうち捨てておいたことがあつたが……。

生活のまじめさ、つらさ——

いつか心も老いて——さうだ、その事だ——忘れてしまった。

今支那も湖北の果、
瀋陽の城の歸るさ、

ふと十五夜の笛にそそられ、
さうだ、思ひ出した。さうだ、その事だ。

車を停めて何になる。

去！ 馬夫。歸つても可いんだ。」

去！ 馬夫。歸つても可いんだ。」

去！ 馬夫。歸つても可いんだ。」

*

予は嘗つてこれまで書いて、次穂を失つてそのままにうち捨てておいた。それでも氣がかりになるからこの春、京津から、汴、洛、龍門の方を旅行する時も一緒に持つて行つた。安徽省の徐

州に一宿した晩は、隙もあり、退屈でもあつたから、この序の終末を附ける積りであつたが、客棧の中庭に呼んだ歌女の胡弓の音にくつつたくして到頭またうち捨ててしまった。無論洛陽の汚ない客舎で續稿を書く氣は出なかつた。

それで今度この八月、所用あつて東京に来るときも、またまた之を行李中に收めた。何處かの旅舎に於て隙のある時に急いで書き終へ、すぐ島木赤彦君の手に渡さうと思つたからである。今、午前、予は停車場ホテルの窓から、初秋の空氣遠近法を見せたる、繁錯なる市街の屋根の海を眺めてゐる。そして獨りで腹立しく叫んだ。何だつて二年前と今と、こんなに萬事が變つてゐるんだいと。二年前の東京は少くとも予に取つて、こんなに殺風景で、冷淡な處ではなかつた。今唯旅舎の窓から、その横顔を

窺き込んだだけでは、大阪も、京都も變りはしない。否、否、ベチンファン北京飯店の三階の窓から、前の通りを眺めた時の氣持とも變りはしない。和辻は予のことを、ひどくコスモポリット臭くなつたと言つた。どうもこんな筈ぢやなかつたんだ。

で今更こんな詩集を出すのはいよいよ詰まらないことに感じられる。が約束した以上は、唯早くこの序文さへ書き終ればそれで片がつくのだから、我慢しよう。

「だが、」一寸予は反省する。「だが然し、予は尙ほ或る執着を有する過去を持つてゐる。」どうもこれが予の本音ほんねであるらしい。それでやはり「過去」の記念をかう纏つた本にすることに異常の喜悅を覺える。

大正七年九月四日早朝、東京停車場ホテル七十一號室

食後の歌

食後の歌

目

次

金粉酒……………(三)

兩國……………(五)

珈琲……………(七)

五月……………(九)

朝の新茶……………(一一)

序

に於て

後街時調

一→歌の食←一

該里酒	……	(一四)
薄荷酒並序	……	(一七)
曇り日の魯西亞更紗	……	(二四)
二月空	……	(二六)
ざつくばらん	……	(三〇)
植古聿	……	(三三)
お夏清十郎	……	(三五)
埋れし春並序	……	(三九)

町の小唄

一→次目←一

林檎屋の小娘	……	(四二)
夜學校	……	(四三)
窓の女	……	(四四)
道のあちこち	……	(四五)
築地の渡し並序	……	(四六)
お花さん	……	(四八)
お榮さん	……	(四九)
幕間	……	(五〇)

ねざめ……………(五一)

今日の芝居……………(五二)

八百屋……………(五三)

鳥屋……………(五四)

工場がへり……………(五六)

本町通り……………(五八)

竹枝

こぼろぎ……………(六〇)

海の入日竝序……………(六二)

石竹花竝序……………(六四)

絳絹裏……………(六六)

松の木やり……………(六九)

筍青……………(七一)

斜街小曲

桐の雨……………(七四)

怨情……………(七五)

邪推……………(七六)

根なし草……………(七七)

かぞへ歌……………(七八)

街頭風景

玻璃問屋……………(八〇)

街頭初夏……………(八五)

物いひ……………(八七)

五月の頌歌……………(八八)

立秋の日……………(九五)

市場所見……………(九八)

こぞの冬……………(一〇一)

←歌の食後→

目次

秋……………(一〇一)

河口風景……………(一〇四)

五月の情緒……………(一〇五)

雪中の葬列……………(一〇九)

春の雪……………(一一〇)

劇中の插曲

杜鵑……………(一一四)

沖の帆かげ……………(一一六)

Elegia di un filosofo giovane……………(一二三)

抒情小吟

← 歌 の 後 食 →

窓のながめ 五篇……………(一三)

よるよるは 九篇……………(一六)

夜よるは……………(一六)

車……………(一六)

河の遠見……………(一七)

人 心……………(一七)

犬ふぐり……………(一七)

やはり何より……………(一八)

→ 次 目 ←

薄なさけ……………(一九)

飛行船……………(一九)

夜ふけには 八篇……………(二〇)

消 息……………(二〇)

火の番……………(二〇)

たまたまは……………(二四)

むかしの仲間……………(二四)

飛行機……………(二四)

女 よ……………(二四)

たとひ品は……………(二五)

食後の歌

→歌の後食←

目次終

硝子のひび……………(11)



金粉酒

オオドキイドダンチック
Eau-de-vie de Dantzick.

黄金こがね浮うく酒しよ

お お、五月、五月、五月、小酒リケエルグラス盞さん。

わが酒舗バアの彩色玻璃ステンドグラス、

街まちにふる雨あめの紫むらさき。

をんなよ、酒舗バアの女おんな、

そなたもうセルを着きたのか、

その薄うすい藍あゐの縞しまを？

まつ白しろな牡丹ぼたんの花はな、

觸さわるな、粉こなが散ちる、匂ほひが散ちるぞ。

お お、五月、五月、そなたの聲こゑは

あまい桐きりの花はなの下したの堅笛アウブの音ね色いろ、

わかい黒猫くろねこの毛けのやはらかさ、

おれの心こゝろを熔とかす、日本にっぽんの三味線さんません。

Eau-de-vie de Dantzick.

五月だもの、五月だもの——

(V. 1910)

兩 國

兩國の橋の下へかかりや

大船は檣を倒すよ、

やあれそれ船頭が懸聲をするよ。

五月五日のしつとりと

肌はだに冷つめたき河かはの風かぜ、

四ツ目よつめから來くるる早船はやぶねの緩ゆるかな艫拍子ちゅうしや、

牡丹ぼたんを染そめた袷纏あせぢんの蝶々てふてふが波なみにもまるる。

灘の美酒、菊正宗、

薄玻璃の杯へなつかしい香を盛つて

旗亭の二階から

ぼんやりとした、入口空、

夢の國技館の圓屋根こえて

遠く飛ぶ鳥の、夕鳥の影を見れば

なぜか心のこがるる。

(V. 1910.)

珈 琲

今しがた

啜つておいた

Mokkaのほひがまだ何處やらに

残りゐるゆるゑうら悲し。

曇つた空に

時々雨さへけぶる五月の夜の冷こさに

黄いろくにじむ 華電氣、

酒宴のあとの雑談のやや狂ほしき情操の――

さりとして別にこれといふゆゑも無けれど、

うら懐しく

何となく古き戀など語らまほしく

寂としてゐるけだるさに

當もなく見入れれば白き食卓の

磁の花瓶にほのぼのと薄紅の牡丹の花。

珈琲、珈琲、若い珈琲。

(V. 1910.)

五 月

五月が来た。郊外を夕方歩けば

家々の表で藁を燃すにほひ、

林の櫟に新芽が出、

葉茶屋に新茶、

落日の金茶、

伯爵家の別荘には罌粟が赤く咲いたげな。

人をたづねて街をゆけば

酒屋の電氣が菰の銘を照らし、

みすぼらしい小間物屋にも夏帽子が出、
そして呉服屋で暖簾を取込む。
五位鷺が啼く原を通つて小川に沿つてゆき
早くお前と會ひたい、いつもの所で。
五月が来た、五月が来た、
一年経つてまた五月が来た。
(V. 1910)

朝の新茶

櫻實さくらんぼが熟なし、草くさのかけが
重おもくざわざわして、間々露つゆ冷つめたく！
櫻さくらの花はなのしつこいかをり、
煉瓦れんがの壁かべに差さす日ひの華はなやかさ、ういういしさ。

かゝる朝あさ、庭にわを歩あゆみ
草上くさのへに坐まして新茶しんちやを啜すれば、
五月ごごの朝あさのはれやかな心こゝろの底そこに、

世界のいづく、草の葉の一つにだに缺けざるかの一味
の悲哀の湧くをこそ覺ゆれ。 (V. 1915.)

博の薄茶

博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶
博の薄茶

後街時調

後街時調
後街時調
後街時調
後街時調
後街時調
後街時調
後街時調
後街時調
後街時調
後街時調

齋里西

「齋里西」の主人

該里酒

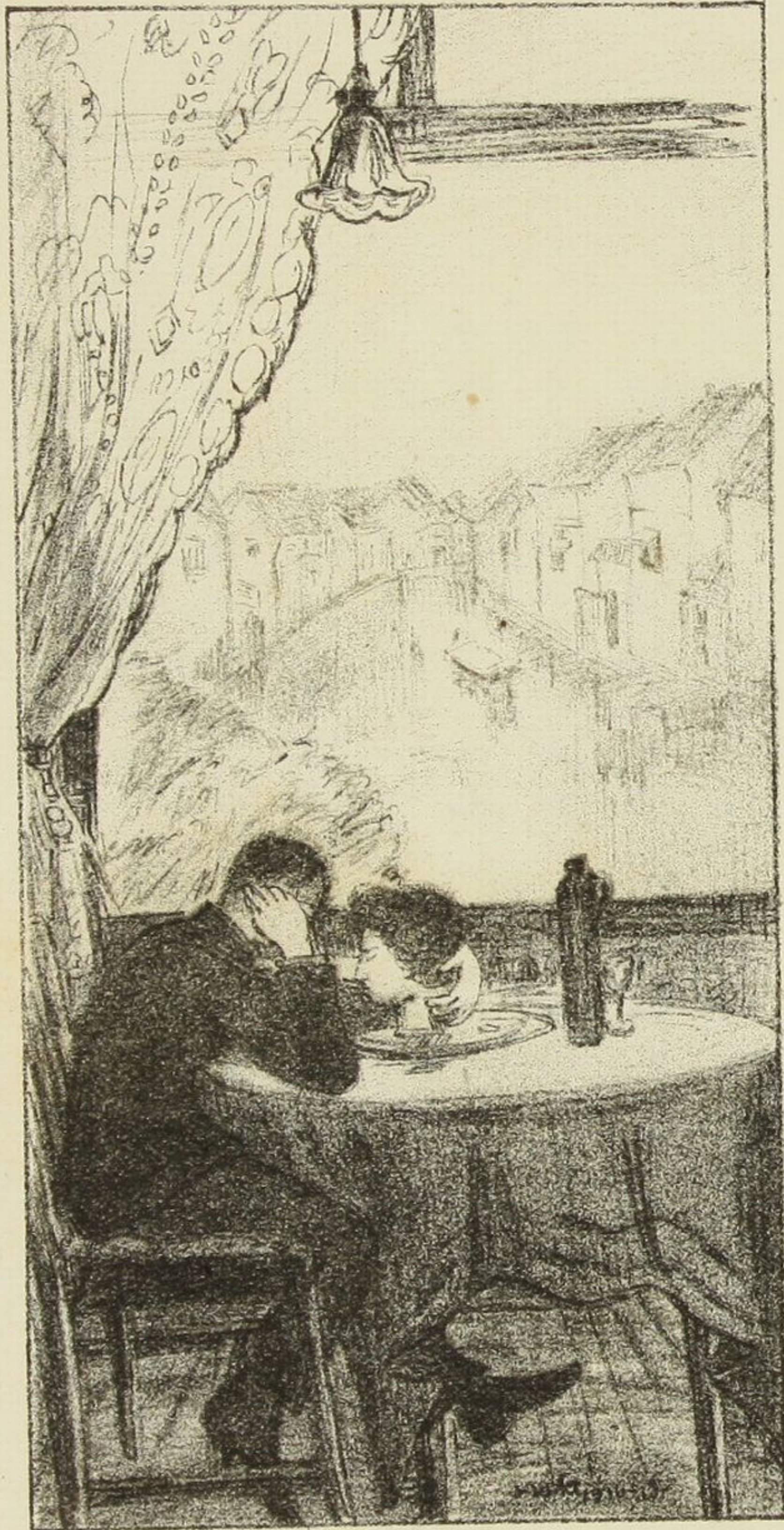
(「鴻の巣」の主人に)

← 食 後 の 歌 →

冬の夜の暖爐の
 湯のたぎる静けさ。
 ぽつと、やゝ顔に出たるほてりの
 幻覺か、空耳かしら、
 該里玻璃杯のまだ残る酒を見れば
 ほのかにも人の聲する。
 ほのかにも人すすり泣く。

← 該 里 酒 →

「え、え、ま、あ、な、に、ご、と、
 ぞ、い、な……あ……」と
 さう云ふは呂昇の聲か。
 この春聴いた——京都の寄席の、
 それをきいて人の泣いたる——。
 乃至その酒のしわざか。
 冬の夜の静けさに
 濁く澄む、該里の酒。



← 歌 の 後 食 →

さう云ふは呂昇の聲か、
乃至その酒のしわざか。
幕あけて窓から見れば
星の夜の小網町河岸
舟一つ………かるき水音。

(XL. 1910.)

薄荷酒 竝序

夜八時を過ぎて後、外套の襟を立て、襟巻に唇を埋めて浅草藏前植木屋に歌澤松聲會を聴きにゆく。始めてかかる會に赴いたのは何時であつたか。まだ學生としてかういふ處へ來るを憚つて、そつと隠れて聴いたころは、人のこの種の歌をうたふを聴けば、何とも分らぬ不思議の情動に襲はれたものであつた。それを聴けば、わたくしのまだ頑はないころの社會、そこに住んだ人々の面影、またその頃の生活感情がありありと想起せられた。眞實か、幻想か、定かならざる過去の記憶か、或は後日の無意識の詩作か、今

更その執れなるかを判別することは出来ないが、或る情趣の國が、かゝる際、倏忽としてわが眼の前に展開したのであつた。後にわたくしは此曖昧模糊たる寫象を蒐めて一篇の戯曲「柏屋傳右衛門」を作り、自分では私かに心ゆくことに思つたりなんぞしたことがある。

その頃聴いたのは松聲會でなくて、歌澤溫習會の方であつた。芝とし芝みねなどと云ふ美聲の老女もまだ微かに覚えてゐる。芝平といふ頭の禿げたる人が居て「わし國」を歌つた。心易い傍人が、あれは素人の名人で「白酒」が得意だ。渾名を「禿平」と云ふなどとわたくしに教へてくれた。かゝる會には美しい

聴衆も多くて、飛白の羽織に小倉の袴を穿つた身の風情を恥かしいと思ふころもあつた。やゝ年とつた男の人々のうちには、川柳の回覽雜誌のことを話し合つてゐるのもあつた。まだ年わかき母の膝から滑り落ちた幼児の、ふとわたくしの足袋の孔から親指の出たるを見て、指を入れたときに、其母の困つた様子をしたらやうなこともあつた。が年月の経るまゝにさう云ふ聴衆のうちからわたくしを見出して挨拶するやうな人も出て來た。百回記念の眞菰の繪を染めた樂燒の湯呑を配つた頃から、常盤木俱樂部の此會は餘り盛らぬやうになつた。

そしてその頃からわたくしは松聲會の龍美太夫と云ふ老人の歌ふを貪り聴くことを覺えた。この老人がもと大きな乾物屋の主人であつたと云ふやうな噂が、わたくしをして、その人を一層なつかしいものに思はせた。老人は「朝日」「高砂」などを沈着なさびのある、いなせな聲で歌つた。そしてわたくしは、わが「傳右衛門」にも「高砂」を歌はした。今夜は「わがもの」であつた。少年時代から聴き覺えた懐かしい歌曲であるが、今日はなぜだか、感動しなかつた。寅松は「朝日」であつた。聲も好し、量も十分ながら、如何にも文法的で、むしろ乾燥なものに聴きなされた。小登良は家元の絃に出て、今夜は歌はな

わたくしは不用な偶然的印象から力めて遠離して、この音曲の有する一種固有の悲哀の精神に到達しようとして欲した。が然しそれは、少くとも今夜に於ては無益であつた。一度わたくしに許されたる其味樂はいつしかにわたくしを離れて居る。わたくしは失望し、寂しいことに思つて、とぼとぼと夜の道を歸つた。そして歸來舊稿を讀みなほして見た。(20. I. 1916.)

投節を聴き歸る夜の薄荷酒は

味^{あじ} 殊^{こと}なれども 悲哀^{かなしみ}あひ似^にたりや。
その青^{あを}き酒杯^{さかづき}の底^{そこ}にくらき燈^ひともり、
男^{をとこ}はうれはしげに頬^ほ杖^{つゑ}し、
女^{をんな}は耳^{みみ}許^{もと}に口^{くち}よせて暗^{あん}示^じを與^{あた}ふ。
ゆるやかなる音^{おん}曲^{きょく}の中^{なか}には、
雨^{あめ}後^{あと}のうち濡^{しめ}りたる梧^{あまぎ}桐^りの葉^はに月^{つき}かげさし、
藏^{くら}の窓^{まど}より燈^{とも}灯^{しび}もれにじみぬ。
やはらかに、あまく、やや重^{おも}き、小^{ちひ}さき液^{えき}體^{たい}の珠^{たま}は
冷^{ひや}やかに舌^{した}のさきより消^きえて、たゞ耳^{みみ}鳴^なりの
まだ残^{のこ}るうす暗^{くら}やみに、赤^{あか}き幕^{まく}音^{おと}なく垂^たる。

かなしき女^{をんな}の衣^{きぬ}摺^{すれ}の如^{ごと}く、またにほひの如^{ごと}く、
黒^{くろ}き川^{かは}の面^{おもて}を舟^{ふね}ゆく見^みゆ。この青^{あを}き酒^{しゅ}の、
その底^{そこ}にまだ沈^{しづ}む蘭^{らん}奢^{しゃ}待^{たい}、執^{しよ}の頸^{うなじ}の、
唇^{くちわら}にわりなしやはたからむ、おくれ毛^けのたば。

曇り日の魯西亞更紗

←歌の後食→

銀いろがかつた灰色の
街の柳よ。午後二時ごろの
濁つた雲の水底にほんのり青ばむ日輪さま。
なぜかあの眼がちらつきます。
昨夕見た眼が。襟もとが。

曇り日の

魯西亞ざらさの絹更紗の手觸りは

←紗更亞西魯の日記曇→

暗い緑の中にほんのり青ばむ薄紫のあらせいとう。
さらさらと冷い音のそのなかに
なぜかやさしい口許が。

初秋の曇り日の悲しきところを何にたとへむ。
子持になつた三毛猫のやつれやうとはいかがです。
左様さ、それも可けれども、
河のむかしの白壁にぼつとさす燈の、にはか雨、
月は天空、雨は軒、
梧桐の葉に露が光つて、河ゆく船が苦あげる。

ままになるならこの薄玻璃の
まですらの酒よ、夢になれ。

(XII. 1913.)

遠い三味で身がほそる。しづかな夜に
鎗さびを歌ひ終つた歌澤小登良。

あれやこれやの花模様の魯西亞更紗のさらさらと
風が出てきて葉をならす。

銀いろがかつた緑色、

いつしかに夜もふけそろ、河岸みちを

鍋焼餛飩がとほります。

曇り日の魯西亞更紗は

何にしようぞいの。裁つをし、袋戸棚に入れておこ。

二月空

← 歌 の 後 食 →

あまり見事さに印度更紗を買つて来た。
尺にも足らぬ小切なり。
何とせうぞの。
あまりしほらしさに水仙植ゑて窓に置けば、
花はもとより葉もしほれた。
紺瑠璃の鉢のさびしさ。
何とせうぞの。

← 空 月 二 →

今日は朝より雨もよひ
窓の玻璃に凝る露は
溶けて流れて
とけて流れて金剛珠。
十時ごろのけうとさに
自分で著た珈琲の
あまり黒いは濃すぎたか。
ええ、何とせうぞの、二月空、

(II. 1912.)

— 歌の 後 食 —

さても夜更はしんしんと
心寂しく、饅頭屋の聲もかすみて
それとなくはづむ話に
子の欲しき願なんぞと、それから
女同志の高ばなし。

ざつくばらんの雨の夜の

— 歌の 後 食 —

ざつくばらん

雨の夜の
縞のお召の青やぎ地、
をんなは三味を下におき
襟合はすとてまつ赤なる
襦袢の胴をちらと見せ、
そしらぬ顔に笑ひたる—
薄手の猪口の白鷹の

やや興ざめし女かな。
と見れば柵の鬼薊。

(V. 1912.)

古 棧

古棧の中へコニヤックを入れてもらつて—— 例の如

く——

それで何気なく指さきで卓を叩きながら——

刻々に予の心は驚く。微笑——

少し誇張した眼付—— 始終足を動かして、

抱くやうに、椅子のよりかゝりに腕をもたせ——

真に美しい皮膚——

濃いお納戸のじみな羽織——

昔美人との評判だつたが、今とても——
眉こそは剃つてをれ、どことなきやさしさを——

にほふ植古聿、コニヤツク、鉢の牡丹、

月夜に差す汐の如き悲哀の情緒、

瓦斯の燈は青白く——

もとより語ることはつまらない噂なれども、

春先はのぼせるといふ——牡丹は見ごろなりといふ——

今年是不景氣なりといふことに過ぎねど

限りなくわが心はしめやぎ、

つひに予は兩手にて眼をば被ひぬ。(V. 1912.)

お夏清十郎

向ひ通るは清十郎ぢやないか、

笠がよろ似た菅笠が——

菅の小笠は似よとても

向ひの LOGE の右の端、

夜目にはしかとは見分かねど……

かう人込みの中なれば

眼鏡もかけはせうなれど、

あの横顔は似よとても

よもやわが「西班牙」にはあらざらむ、

いくら戯言がをかしというて

ああしどけなく顔そむけ

笑ひはせまじ、それならば。

あの眼鏡のほしさよな。

OPERA-GLASS のかれたやな。

隣の客よ——とは思へども、

成金めいたその面の高慢ちきが氣にさはる。

PROCCENIUM の後へと

取つてつけたるちよぼ床の

太夫の聲も腹立し。

ええ、もどかしや、ぢれたやな、

何から何まで氣にさはる

今日は如何なる黒日ぞや、

なほつた疵が身にうづく。

清十郎ころさばお夏もころせ、

いきて思ひをさせうよりも。

— なあ、させうよりも。 (III. 1912.)

埋れし春竝序

或る家の、嘗てわが友の住ひける小房には、
 その土地のまだ鳥原と呼びなされけるこ
 ろ、良からぬなりはひせし形見に、日の光朧
 ろかなる砂丘を背景とせる春宮祕戯を畫
 きたる壁のありけるを、近きころ塗りこめ
 たりとぞ云ふ。

春の夜の燈を消して

轉ろにも壁に耳あつ。

しんしんと夜はふけて、

← 歌 の 後 食 →

窓の外、ほのぼのと月明り、

淡路島、遠き辻占

過ぎゆけど、事もなし。

静かなる夜の物の音。 (V. 1911.)

町の小唄

林檎屋の小娘

← 食 後 の 歌 →

林檎屋の小娘が
今日もまた前掛で
赤い林檎を磨いて居る。
息をかけては拭いて居る。
だがまだ林檎は堅さうだ。
丁度お前の心のやうに。
せめて、あの人にもとねえ、
拭けば可いのに。
まだ情を知らないね。

夜 學 校

← 夜 學 校 →

土曜日なのに、もう九時なのに
夜學校にはまだ燈が点いてるよ。
あれお聴き、鐘がなる。
なんぼ何でもねえ、
早く退けたら可いのにねえ。

道のあちこち

道の向うを女が通る。

頭巾目深に通る。

こつち側は男がゆく。

寒むさうにゆく。

誰も知らない夜道だもの、

それに急ぎでもなささうだもの。

たとひ知らない人だとして、

一緒に行つたつて可からうにね。

窓の女

新開、新開地の

酒屋の隣の

乳屋の二階の

窓の女。

夜になるのに化粧する。

……別に不思議もないんだが。(だがね。)

築地の渡し並序

築地の渡しより明石町に出づれば、あなたの岸は月島、また佃島燈とところゝ。實に夜の川口の眺めはパン會勃興當時の藝術的感興の源にてありき。永代橋を渡つての袂に、當時永代亭といへる西洋料理屋ありき。その二階の窓より眺むるに、春月の宵などには川の面鏡金したるがごとく銀白に、月影往々その上に激瀾たる光を流しぬ。かゝる折しもあれや、一艘の小さき舟來る。形あたかも陰畫の如く、白光の面に劃然たる黑影を現して、舟中の人々の拳を闘はし

嬉遊する様、眞に滑稽の極みにてありき。我等パン會同志は屢この家の階上に集ひてパンを祭るの酒宴を開きたり。

房州通ひか、伊豆ゆきか、

笛が聞える、あの笛が。

渡しわたれば佃島。

メトロポオルの燈が見える。



← 歌 の 後 食 →

お花さん

深川の西洋料理の二階から

お花さんがまた大川を眺めてる。

入日の影は悲しかる、

細い汽笛が鳴いて来る。

お前がひとり悲しんだとて、歎けばとて。

つぶれた家は立ちません。

あんまり何して粗相はしまいこと。

—お— さ 榮 お —

お榮さん

雨が降つてもかありかり
風が吹いてもかありかり。
汽船問屋のお榮さん
手紙書くには書いたけど
聞くか聞かぬか氣にかゝる。
かりか、あかりか、どつこいさのち。

(以上 II. 1910.)

幕間

—→歌の後食←—

雪がふる。ちらちらと。

幕間の運動場。

かはいお酌の

花簪がちらちらと。

「あれ、また、今夜は降るのねえ。」

ねざめ

—→めざれ←—

信心なんぞは無いんだが——いつも朝。

あの鐘の音とお經の聲が聞えると、

でもねえ、何かかう。

罪深いやうにも思ふのよ。

わたしよつ程舊弊ね。

今日の芝居

← 食 後 の 歌 →

今日の芝居はついぞまだ
聞いたことのない外題、
筋もようは覺やせなんだが、
西の棧敷の三番目
あの姿がまだちらちらと。

八百屋

← 八 百 屋 →

戯曲「夜」中にて女の曲藝師の歌ふ歌
わたしや八百屋ぢやなけれども
梨に林檎に巴丹杏
選りどり見どりに取らしやんせ、
どうせ惚れたが負けぢやもの、

商賣しょうばいなんですからねえ。

鳥 屋

魚いさな河岸がしを入いると左ひだりにかつぶくの上うへき老女おんなの
屋や臺たい壽す司し屋やありき。その後のちろは大きおほなる鳥とり
屋やの店みせにて鳩とび、七面しちめん鳥とりなど飼かひ居ゐたり。七面しちめん
鳥とりは鳥とりなれども若わかき人ひと間の女をんな來きるときは後のち
を追おふとぞ、かの老女おんなの語かたりし。

殺ころされる身みとは知しらないで

よぼよぼな年としよりの七面しちめん鳥とりが——まあいやな。

わかい女をんなのあとばかり追おつて居ゐるのさ。

酷むごいやうだがねえ。私わたしは鳥屋とりや、

だがね、
そらもう六時の笛ですよ。
また餓鬼どもが、家であがあ云つてるよ。」

工場がへり

小石川の新聞道路を行きゆき女たちの語れ
る

「私や生れて三度島田を結つたのよ。

十六の時一ぺんと、

祝言の時一ぺんと、

それから……いつか、もう一度。」

「およしなさいよ。阿呆らしい。」

私だつてもねえ、三度や五度は結つてるわ。

本町通り

なんぼ姿色きりやうが自慢じまんでも

ぞろりぞろりと日ひの晝間ひるま、

本町ほんまちの大通りおほどほり、

あんな匹田びつだの大模様おほもよう、

他人たにんだけれど汗あせが出る。

たつた若い時わかきときですもの、

いいわ、構かまはないとも、わたしが最負ひんぎ。(以上目. 1910.)

竹
枝

こほろぎ

一→歌の後食←一

こほろこほろと鳴く蟲の
秋の夜のさびしさよ。
日ごろわすれし愁さへ
思ひださるるはかなさに
袋戸棚かきさがし、
箱の塵はらひ落して、
棹もついで見たれども、
あはれ思へば、鄰の人も聞くやらむ、

一→ぎろほこ←一

つたなき音は立てじとて、その儘におく。
月はいよいよ冴えわたり
悲しみいとど加はんぬ。
晝はかくれて夜は鳴く
蟋蟀の蟲のあはれさよ。
しばしとぎれてまた低く
こほろこほろと夜もすがら。

(XI. 1910.)

海の入日並序

……この南國の半島に於ては自然でさへも輕佻である。日のうちに海や空が幾度其色を變へるか知れはしない。遠く、水平線の上に相模の大山の一帶が浮んでゐる。予の見たのは夕方であつた。緑の水の上の、入日を受けた大山の影繪は眞に蜃氣樓であつた。その赤と云つても單純な赤ではない。燈光に照らされた自然銅鑛の赤である。そして其の日かげの紫は正に濁つた螢石の紫である。其間にも殊に光つた岬影の一部は、あかあかと熱せられたる電氣煖爐の銅板よりほかには比較の出來ない光

澤に閃いてゐた。遠くこなたの岸からその不思議な陸影を眺めてゐると、いつか心は阿刺比亞奇話のあやしい夢の國に引き入れられるやうに思はれて來る。(L. 1912.)

濱の眞砂に文かけば

また波が來て消しゆきぬ。

あはれはるばる我がおもひ、

遠き岬に入日する。

石竹花並序

ある日の夕暇乞にと縁者の家を訪ね、其家の老女から昔話をきいた。東京からさう遠くない港へ押送りが入つて、學問好きな人の家に「窮理問答」「世界膝栗毛」「學問のすゝめ」などが齎らされ「當世女房氣質」「北雪美談」の並ぶ書棚を占領し、英山英泉の華魁、豊國、國貞の役者繪、國滿が吉原花盛りの浮世繪などの繪卷の後、に芳虎が「英吉利國」清親が「東京名所圖」や「無類絶妙英、國役館圖」「第一國立銀行五階造」の圖などが繼ぎ足され、獵虎帽の年寄りの物識りが須彌山説の代りに西洋舍密の話が説かれたころの事である。

予の眼には其時代の人々の姿がまだありありと残つてゐる。そして古い文庫倉から、其當時の遺物を捜し出す心持は一種特別である。「雨の夜に通ひくる黒船」の大津繪横濱へ通ふ蒸気は千枚張りの女車この家へ通ふは人力車の異國味甚句は今なほ耳朶に在つて、其曲調の回想は涙を催すの悲哀を伴ふ。もと押送りに乗つて東京通ひをした船頭も今なほ生きてはゐるが、其當時の氣分を思ひ起すにしては皆餘りに老い過ぎた。子供等もはやお白お白の白木屋の才三さん、丈八ッさんの毬唄は歌はぬ。其代りに幸にもそんな唄を今聴くと、その聯想が直ちに朦朧たる過去世を開く。がそんな聯想の後には、

またさう云ふ世界の段々と崩されて行つたといふ
 痛ましい記憶が続く。其中にも、予に尤も深い印象
 を與へたものは、耶蘇教の傳來の沿革である。初め
 は小さい家に日曜日の夜毎に赤い十字の提灯が點
 された。それが廢れたころは、怪しい一人の男が寂
 しい村道に立つて夜々辻説教をした。
 いろいろ思ひ出して來ると、十年二十年の間にも悲
 しい有爲轉變がある。
 予はその家を辭した後に海濱に赴いて、文色の分ら
 なくなるまで海の面を眺めあかした。成程人の世
 はかく變るが、然し二十年三十年否々更に其前にも
 或はわかき人のまた今の予の如く、はかなき幻像と

悲しい感情とを抱いて、かく海の前に立ち盡したも
 のがあるかも知れぬ。(1912)

夕暮れがたの濱へ出て

二上り節を唄へば

昔もかく人のうたひ候と

よぼよぼの盲目がいうた。

さても昔も今にかはらぬ

人の心のつらさ、懐しさ、悲しさ。

磯の石垣に

うす紅の石竹の花が咲いた。

絳絹裏

←歌の食後→

床の間の筆をとりにと
土用ぼしの下をくぐつたら
小袖の裾に觸れた。
なんとも云へぬ亂れごころに
はつと思うて首は引いたが、
南無、神も咎めたまはじ、
今は亡き人のかたみなれば。

(IX. 1910.)

松の木やり

←松の木や→

坪庭に植うる松なれば
目出たき松なれば
枝は折るまいよ。やあれさ。
紺の暖簾もなつかしき
老舗の奥の坪庭へ
御祝儀の松を入れる。
奥の座敷は新座敷、

嫁取座敷。

されば松も二本のめをの松、

この松は目出たき松、

木戸口は狭くとも

松の枝は折るまいよ。やあれさ。

目出ためてたの若松さまよ

枝も榮える。葉も茂る。

やあれさ、えんやらさ、

松の枝は折るまいよ。(XII. 1910.)

筭 青

山の湯あみのつれづれに

また秋の夜のわびしさに、青の繪の具で

二の腕に、花と葉と本字一字の

人の名をかいても見たが、

それも湯までの興である。

湯にはひつたら消えるだろ。(VII. 1911.)

斜街小曲

桐の雨

たつての望みに、つひ氣が變り
悪い唄と知りながら、桐の雨を弾いた。
さてはたくみにてありしよな、其後ふつと。
足斷つた男の、男心のつれなさ。(IX. 1915.)

← 食 後 の 歌 →

怨情

直あさん今晚は來ないのかしら。
待つともなく話しこんで
御座敷さへ斷つたが……
ねえ、おかみさん、
直あさん今晚は來ないのかしら。(IX. 1915.)

← 情 怨 →

根なし草

瓶の中の青い花、

いたましけれども、根なし草は枯れる。

今更いまさらに何なにとしようぞの。

ねえ、お前まへ根なし草は枯れる。
(1915)

邪推

それは貴方の廻り氣よ、

それは邪推といふものよ、

あの人だつて、ねえ貴方、

随分苦勞してるのよ。
(IX. 1915.)

かぞへ歌

一 歌 の 後 食 一

二月には雪の下から葉を出した。

三月には莖出した。

四月には花咲いた。

さて五月も末となり、身持になつて

やせ細つたいたいたしさ。お前、酸摸、忍びづま、

(1916)

街頭風景

玻璃問屋

←→ 歌 の 後 食 ←→

空氣銀縁くわいきぎんぎんにしていと冷ひやき

五月ごごの薄暮はくぼ、ぎやまんの

數々かずかずならぶ横町よこまちの玻璃問屋はりもんやの店先みせさきに

盲目めくらが來りて笛ふえを吹ふく。

その笛ふえのとろり、ひやらと鳴りゆけば、

青あをき玉たま、水色みづいろの玉たま、珊瑚珠さんごたま、

管くだの先さきより吹ふき出いづる水みづのいろいろ――

←→ 屋 問 璃 玻 ←→

(一瞬しゆんの胸むねより胸むねの情緒せいちゆう)。

流れ流なれてうち淀よどむ

流れを引ひいてびいどろの細ほそき口くちより飛とぶ泡あわの

車輪くるまわまはせば風鈴ふうりんもりりんりんとなりさわぐ。

われは君きみゆる胸むねさわぐ。

おどけたる旋律めろぢあきけど、さはあれど、

雨後うごの空氣くわいきのしつとりと、

うちしめりたる五月ごごの暮くれしがた、

←歌の食後→

びいどろ簾懸けわたす玻璃問屋の店先に

雲を漏れたる落日の

その一閃の長笛の銀の一矢が、

ぎやまんの群より目ざめ

ゆらゆらとあえかに立てる玻璃の少女、

(ああ人間のわかき日の

唯一瞬のさんちまん)

それを照してまた消ゆる影を見るゆゑ、

←玻璃問屋→

われはそれ故涙する。
君もそれゆゑ涙する。

落ちし涙が水盤に小波を立て、

くるくると赤き車ぞうちめぐる。

車は廻れ波おこれ、

波起すべう風來れ、

風は來りてりんりんと風鈴鳴らし、

細君は酸漿鳴らす玻璃問屋の店先に



—→ 歌 の 後 食 ←—

盲人^{めくら}が來^{きた}りて笛^{ふえ}を吹^ふく。
(四・1909.)

— 街 頭 初 夏 —

街頭初夏

紺この背せ廣ひろの初はつ燕つばき
地ちをするやうに飛とびゆけり。

まづはいよいよ夏なつの曲きょく、

西さい——東とう西さいと簾みす卷まけば

濃こいお納なん戸との肩かた衣ぎぬの

花はなの「昇しやう菊きく昇しやう之の助すけ」*

義ぎ太たい夫ぶ節ぶしのびら札ふだの

藍あの匹しら田たもすずしげに
街まちは五月ごに入いりにけり。

赤あかの襟わ巾た初はつ燕つば

心こゝろも軽かろく舞まひゆけり。

* 珈琲カヒの中なかにキスキイの酒さけ入いるるを好おみ給たまふ
ほどの人ひとは、この行ぎやうの次つぎに

「いよ御ご兩りやう人にん待まちてました」

の一行いっぎやうを入いれ試こころみ給たまへ。(V. 1910)

物
い
ひ

四よ本ほん柱ちゆうの總そう立だちに

棧さしき敷じきときめく國くに技ぎ館かん、

お酌しやくのくせと・あられなや

聲こゑをはりあげ「明あき石しやく龍りゆう」。(XII. 1910)

五月の頌歌

さういふ五月が街に來たー

珍らしくも梅雨が霽れ、

重々しい灰色の雲を透かして太陽が

銀座の角の時計屋の窓の硝子を射とほした。

じいん・かつくろ……

翡翠、碧玉、土耳古玉、

四つ葉クロオバ、忘れな草、また黄金の馬の蹄の留針

はむらむらばつと輝いた。

じいん・かつくろ……

折柄赤銅の小屋の屋根にて鳩は尻尾を高くあげ、

一きは高く、

じいん・かつくろと鳴きたれば、

主人は片眼より廓大鏡を外し。

注意深く机の片隅に置き

いまいましげなる顔をして

時計を見れば、短針もXIIの所へ往つてゐる。

じいん・かつくろ……

— 歌 頌 の 月 五 —

それを好い氣に青山の喇叭調練の新兵もどき、
聲の好いのも悪いのも、調子も節もお構ひなく、
じんじん、がんがん、ちんちんと
正午の鐘をぞ搗き鳴らす。
主人額に皺を寄せ、
また廓大鏡を目にはめて、
タバソ會社の特製の機關をみる眼差も
五月となれば憎からず。

— 歌 の 後 食 —

歌ひ時計の氣樂さは
また午砲も鳴らぬさきより歌ひ出し、
三味線もつた「萬龍」が首を動かし白眼をし、
オルゴール仕掛のお座附は
いと興さむるわざながら、
隣の黒人は大きにうちはしやぎ、舌を出し、
十二の數をも待ちきれず、タラントラをぞ踊りける。
じいん・かつくろ。
さればここでもかしこでも

さういふ五月が街に来た。

八百屋には枇杷の走り、草苺、

——茄子のしぎ焼、胡瓜もみ——

電信柱の寄席の太夫のびら札まで

なんとなく華やかな五月が来た。

さうすると高座では

圓喬と云ふ落語家が羽織の紐解き、お納戸のぞろり

としたのを後ろに投げ、

わざとわが手で頬をうち、顔しかめ、

蚊屋の外なる座頭が夜中

蚊にせめられる真似をする。人さし指で蚊をつまむ。

さういふ五月が街に来た。

それ故角の玩具屋の鐵葉細工の噴水は

玉を轉がし、からからと、また福助は太鼓うつ。

紺の背廣を軽くつけ、

磨きたての赤靴に

泥をばつけじと、心持白メルトンの縞ズボンを

かかげるやうに行く人は

黄ろい燈のつく鐵橋を

うち渡り、遠き汽笛のゆるやかに長鳴る聞けば
何とな氣もせはしく、動悸かろく心臓をうつ。

さういふ五月が來るときは

河沿ひの酒舗に入りて、

われは靜かに青きペパミンの酒を啜りて

頌歌つくるを常とする。

小さき給仕は給仕とて

居睡りするのを常とする。

(V. 1911.)

立秋の日

秋風が立てば、問屋にも

淺黄裏地の新荷が着く。

新川新堀の酒屋にも

上の船がつく。

えんやさのこれわいさのよいやな。

火の見櫓に懸る日の

金茶の色もかなしや。

← 歌 の 後 食 →

眞岡木綿の紺のほひのなつかしき
土藏の屋根の忍びがへしに薄ら日影のあたるさへ
秋となればさびしきものを、
まして出窓の浦島艸のそのまま枯れたいいたしき。
角の釜屋の末の娘も嫁にゆく噂さへ、
大山がへりの祝する家の窓さへ、したみさへ、
また河岸ぎはの屋臺鮎屋の小緒さへ……
それやこれやに弱くさす秋の入日……
えんやさの これわいさの よいやな。
日が落ちれば河風の肌にく

← 日 の 秋 立 →

あれ江戸橋に燈がついた。緑の燈がついた。
瓦斯の燈さへもゆらゆらと流るる水にゆらるるものを
……
いたいけな聲して、
魚河岸の窓から漏るる稽古の三味の梅の春さへ、
堀をはづれてほのぼのと
遠き川口の汽笛の音さへ
秋となればさびしきものを……
えんやさの これわいさの よいやな。

市場所見

一→歌の後食←一

沖の暗いのに白帆が見える、

あれは紀の國蜜柑船。

蜜柑問屋に歳暮の荷の

着く忙しさの冬の日

惨淡として霜曇る市場の屋根を照したり。

街の柳もひつそりと枯葉を垂らし

横町の下村の店、

赤暖簾さゆるぎもせず。

街角に男は立てり。

手を舉げて指を動かす

「七番中一あり」と呼びたれば

後場なかば——店の前にも

丁稚また「中一あり」と傳へたり。

海運橋より眺むれば

雲にかくれし青き日は

一→見所場市←一

陰慘として水底に重く沈みて聲もなし。
時しもあれや蜜柑船。
橋の下より罷りいづ。
そを見てあればすすろにも
昔の歌の思ひ出づ。

あれは紀の國蜜柑船。(四. 1912.)

こぞの冬

十一月の風の宵に
外套の襟を立てて
明石町の河岸を歩いたが、
その時の船の唄がまだ忘れぬ。
同じ冬は来れども
また歌はひびけども
なぜかその夜が忘れられぬ。(五. 1910.)

秋

— 歌 の 後 食 —

下席の「國定忠次」
 寄席の燈もうるむ夕ぐれ、
 誰が歌ふ船の唄の追分。
 いづれは悲し、永代も薄くかすみて
 伊豆行きか、汽笛響きぬ。
 渡し場に人も絶え、鷗もかへり
 はや夜の風の身にしむる、秋の悲しさ。(X. 1910.)

— 景 風 口 河 —

河口風景

船ばらす、海燈明を賣る店の
 崩れたる壁ぎには古錨赤く錆びたり、
 夏に遅れし撫子の花もあはれさよ。
 夕となれば
 一しほに身にしみる秋の風よ。
 共同便所の瓦斯の燈さへも
 しつとりと縁に濡れて、
 歌悲し、遠き船の追分。(IX. 1910.)

五月の情緒

←歌の後食→

五月の雨に桐の花の薄紫

そのあまき薫ただよひ、

灰色の病院の窓、

やはらかき白絹のかあてんをそとあげて

今わかき、あえかの女、肺をしもやめる女

なみだぐみ花に見いれる……

燕の来り、また去れる……

←五月の情緒→

むしろ彼のええてるの、はたやはた、くろろふおるむ
の、

夕暮の限りもしれぬ

海にしも似る薄闇の眼のはてへ、

そのはての、そのはてへ往かましかばと

涙ぐみ女思へる……

篠懸木の若葉顫へる……

一→歌の後食←一

雨のいろ利休鼠の絹なして
しとしととうす紅き煉瓦をひたし、
花もなう荒れ果てし若草の醫院遊歩場の垣のあなた、
遠き山、遠き森、街を罩めたる……

あはれ、あはれ、五月の午の病む情緒。(V. 1909.)

雪中の葬列

一→列葬の雪中←一

Djan…… born…… laarr…… don
Djan…… born…… laar, r, r……
鐘の音がする。雪の降る日。
雪はちらちらと降つては積る。
中をまつ黒な一列の人力車。
そのあとに鐘が鳴る……
Djan…… born…… laar, r, r……

←歌の後の食←

銀色とあの寂しい
薄紅と、蓮の花弁…… ゆられながら運ばれて行く、
放鳥籠の鳥と。

今鉄橋の上に進んだ。都會の真中の——
華やかな叫びも欲もさびれた雪の日の都會の——。
黒い無言の一行がひつそりと、ひつそりと……

雪は降る。雪は降る。
雪は降る。雪は降る。

←雪中の葬列←

Djan…… born…… laarr…… don.
Djan…… born…… laar, r, r…… (Xl. 1910)

春の雪

一・歌の食後

提灯屋の阿爺が鼈甲の眼鏡をかけて
大きい提灯へ持つていつて

「賣」といふ字を群青で染めて居た。

「は、ちてえんつとんとつん」。

あたりは待合のこと故に朝つから三味が聞こえる。

「鐘に恨はかずかすごさる。てんちん。」

一・雪の春

そこへ「只今」と入つて来たのが娘のお浦、

見れば髪もそそけ、色も青く、

いかにも気分が悪るさうなり。

さうでもあらう、痛はしや。

だがそのお前に働いて貰はいでは、

この爺の腕ばかりぢやたつきが立たぬ。

氣の毒ぢやあるけれども——思ふ心で表を見れば、

雪がはれて日が輝く。

道端の雪に照る日のまばゆさ、

劇中の插曲

←歌の後食→

はや八時、格子戸があき、
ふだん着のお酌が朝湯へゆく。(V. 1911.)

杜 鵑

その頃われは漸く生活の不安に目を睜りつ。
わが日々の順俗の営みに憤懣の情を發しつ。
かたへには昔の唄耳に悲しきシテエルの鳥
を瞻てはあれども、生活の改造の要求はわが
心を鞭ちたりき。

← 歌 の 後 食 →

青き夜は、窓越しに、靜かに

卓布の角にさした。牡丹花

音なく落ち、杯の緑酒、微に光れる時

杜 ←

室の一隅の黒衣の人の群は

もはや胡散くさき偷視をもやめ

聲は段々に高まる……

Syndicarisme ……

革命…… 實行の前の考察……

一度は血だ……

→ 鵑

牡丹花、五月朔日、

濕りたる梧桐に揺るる雨後の月光は

たつた今聞いたばかりの投節の、こころ忍ばせ、
眼をつぶり、しめやかに

唄うたふ老女の姿……ふと見ゆ……

昔の世……長き橋……岸邊の柳……

青き夜の薄荷酒

いや更に澄みゆくを……牡丹花、

またも散り……

一度は血だ……

自由思想……理性の闘争……

人々の聲あらかに、且つ鳴らす麥酒の杯。

薄荷酒、また牡丹花、

すさみゆくわが心……青葉の空に

啼きすぐるほととぎす。(VI. 1912)

沖の帆かけ

—歌の後の食—

陸軍大臣は辭職せり。内閣は遂に
瓦解すべきか。幌を被へる車
ひそかに或る門を今通過しつつあり……
うとうとと眠むたし。
而して首相の官邸よりは……
何となくさうざうし。玻璃の青みに
夕日やや目に痛し……

—沖の帆かけ—

そは大きな港にして……
商業取引所には人氣引立ち……
且つかすかに物の音、銀色の長きうなりに……
檣數多く立てり、岸の二階の
窓の遠見……豆腐賣る船
老いたる母は慵げに端唄を口ずさみつつ
まばゆげに越しかたを見かへり給ひぬ。
そは大きな港にして——

美しい都の日傘横に傾け、
狭き小路を行きつつ、葬列の鐘を聴きすみ
胸いたむやうに沖を眺めつ。

幾すぢか淡き色糸…… 全国の各實業家
及び新聞記者の團體は集會し、満場一致に……
こんぐらがり、解けもつるる、
その中の青き絹糸を追ひゆきて、
せめて或時の心持だに回想せむものと美き人の
そのかみの面輪などたどり畫きぬ。

鐘かすみ、讀經悲し。

わが母はさかりましぬ、山のあなたに。
夕雲は色あせゆき風耳にざわめき、
悲しき心の薄明に魂は消えゆく……

されど、されど、短き糸よ、

瞬間よ……沖のはたてに

黄いろの帆うつらうつら…… (III. 1912.)

Elegia di um filosofo giovine.

歌の後の食

眼を病む人のやうに、故更に、
白い切れを以て左の眼を繙帯して、
そのうへ古い外套で體を深く包み
そして瞼を閉ぢて、軽く欄干に手を置く。
「主観」と「客観」との範圍に關する考察のうちで
まだ十分に解明の出來なかつた節々を
ともすれば湧き立つ感情の波を鎮めて、
いつまでも、事象の永久の相を観ると云ふ態度に

Elegia di um filosofo giovine.

歸らうと思つて——考へ續けたのだ。

いはば限りなき薄青の海の果てハ
わが思索の鳥は群れつつも飛びゆき微み、
わが耳はいつしかに舞臺の上なる
我國古代音曲のところに聴き澄む。
一種固有なる悲哀の曲調、
單純にしてゆるやかなる女等の肉聲は
今し「おみつの狂亂」の古傳記を歌つてゐる。
數百の人の頭は夜の海の如く連り、

そしてその上を、一すぢの悲しき古曲の精神が
かの小さき星の濡れたる光長く水を引くが如くに
ここにまた遠く流れる。電燈赤き幕。静かにわたくし
は

煙草の灰を落しつつ、また「主観」と
「客観」との範圍に關する考察のうちで、
こんぐらがり、漣れ流るる一節を思ひ續ける。

ふと見る。わが *Oriental* は

物言ひたるあとの表情にて、まだ消えぬ微笑をのこし、

「いなせ」と稱する俗語にて表はさるべき
青年の眼を諦視してゐる。(或る料理屋の若き主人!)
わたくしは目を外らす。そして心の底に、
ともすれば湧き立つ嫉妬の情を鎮めて、
いつまでも事象の永久の相を観ると云ふ態度に
歸らうと思つて、新しい煙草を取る。

我國古代音曲のこころのうちの
東洋傳承の陰鬱なる思想は
單純にしてゆるやかなる女等の肉聲に由り

今し不可思議に數百聽衆の情緒ににじむ。
曲調は次第に下り、一種固有なる悲哀を傳へ
わたくしをも日本徳川時代の
卑しき感情生活の雰圍氣の中に引き入れ、
ともすれば嫉妬の情に傳統の文を織らせる。
わが *Oriente* そなたはわたくしに
深い愛執を起させてはならぬ。嘗つてわたくしは
Antike のあとの鬱散に、すすろにも近代の小説を
讀む人の心もて戯れにそなたに近づいたのだ。

卑しきわが *Oriente* よ、わが *Primavera* よ。
そなたには適當な同伴がある。
今歌つたばかりのそなたの *Tokiyaz* を味ひ、品評し、
そのところに同感するには、他に其人がある。
われわれは各異なる國に在るのだ。
眼をやむ人のやうに、故更に白い
切れを以て左の眼を繙帯して
そのうへ古い外套で體を深く包み、
分裂し、こんぐらがり、醜く荒れたるわが内心を

わが Orientaleよ。わが Primaveraよ。(35.IXI. 1913)

隠さんとすればこそ、軽く欄干に手を置き、
「主観」と「客観」との範囲に關する考察のうちで、
最も解し難き一節を考へるのだ。

そと立ち上る。悲哀の音調——

單純にしてゆるやかなる女等の肉聲は、

なほわが耳にあり。透し見すれば

戸の外は冬の月朧ろかに微むらし。寧ろわたくしは

靜かに長き細道を歩みつつ、ゆるく悲しく

内心の醗酵するを聴き樂します。さらば卑しき

抒情小吟

←め かな の 窓 →

ゆくりなく消息つきぬ。
その友は男にしあれば、
朴訥の男にしあれば、
一しほに心かなしや。

わが心ややに老い
わがかほもふけ荒みたり。
夜おそく鏡屋の前をとほりて、
心ふと一ふと驚く。(K. 1912)

←歌 の 後 食 →

窓のながめ

久しぶりにて街にて
はなしかを聴いてかへれば、
夜おそく家にかへれば、
故しらず、心かなしや。

我をよく思ふ友より

← め が な の 窓 →

紅^{くれない}の口^{くち}にある間^まのいとほしけれど、
つと投げ^なられしすひさしの
夜^よの水^{みづ}に消^きゆるはかなさよ。
敷^敷島の火^ひのしかすがに。

← 歌 の 後 食 →

いくたびか海^{うみ}のあなたの
遠^{とほ}人に文^{ふみ}かかむと思^{おも}ひ、
いくたびか海^{うみ}のあなたの
遠^{とほ}國^{くに}に去^さらむと思^{おも}ふ。
今宵^{こんや}また宿直^{とほみ}の室^{むろ}に。

わかき心^{こころ}は敷^敷島の火^ひの

河の遠見
車の下のあやめ草、大河の遠見にこがるる心、鳥入相
の雲に入る。

人 心

掟は破りて君とわれ、人のそしりもなんのその。さう
云ふ心もあるものと思ひ不思議に思はるる。

犬ふぐり

情を深くつつみたる女を見れば、あくたの中に犬ふぐ

よるよるは

夜よるは

夜よるはねむし口惜し、腹立し、誰も知ることなれど
時としてはまた悲し。

車

忙はしく動く器械の中にたまたま微妙の音を出す車あ
り。油は切れて調革、火を出すうちに情あり。

と考へたれども、現在なければいつやらに、知らぬ
に變らなく、春くるたびに鳥はきて川柳の葉が水にも
まるる。

飛行船

飛行船が見えた。腹が見えた。空の沖をば悠々と泳ぎ
去る大魚見れば、おとななれども何となく悲しき氣の
する夕まぐれ。(IV. 1913.)

り咲きたるやうにも思ふなり。二月の雨のなんとなく
春めき出して、心こそばゆきやうにこそ。

やはり何より

やはり何より、昔たべたるあん餅の深きなさけの思ひ
出さるる。窓のがらすに雨のふる日の午後の暗さにつ
くづくと。

薄なさけ

どこにどうして居るやらむ。到底我慢の出来まじなど

夜ふけには

消 息

静かな夜に長い手紙を西洋の友達に書いたらば何とはなしに心和ぐんた。異國人なれば河の流れよ。かかる思も消息もまた見ぬやうに消ゆるらん、海のあなたに。

火の番

火の番のまはる夜ふけには、日ごろ忘れた思などもまたも浮ばる。泥水にあひるが首を入れてまた出したほど

に、

たまたまは

たまたまはもと知つた女の、人と連れだつて行くのがねたましい氣にならぬでもない。どうせ火に入る身ではなし、あれはあれまでと、家に歸ればそれやこれ忘れはてつつ勞れまどろむさびしさ。

むかしの仲間

むかしの仲間も遠くされば、また日ごろ顔あはせねば

知らぬ昔と變りなきはかなさよ。春になれば草の雨、
三月櫻、四月すかんぼの花のくれなる、また五月には
杜若、花とりどり、人ちりぢりのながめ。窓の外にい
り日雲。

飛行機

飛行機から人が落ちて死んだといふ號外を見ながら、
夜おそく植古聿のむ。何となきいたはしさ、かなしさ
小氣びよさ。小づくりのおかみは沙汰過ぎたれども、
眉は剃れども、

女よ

女よ、そなたはわかけれど美しけれども、こなたが負
けてまでほれる氣はなし。すますのは憎けれど愛その
よきはねたましく、そなたでなうてもこの俺はたと
知つた女がある。また金もある。意氣地もある。所詮
そなたは河原のよもぎ、茶前酒後、また雨のあとの窓
の眺めにはよけれども。飛ぶ鳥よ、なよぬれた燕のそ
れこれのつれづれに。

たとひ品は

たとひ品は低うてもそなたは女、はつと思ふときもある。岩に咲いた紫陽花も雨あとの夕日を受けらればくわつと光るときもある。

硝子のひと

月かげは窓のがらすの一つの罅をさへきらきらと銀色に光らせた。故もなく湧き出でたる今宵の悲哀は、過ぎし日の、雑艸に似る薄情をもいと悲しいものに思

はせた。(X. 1913)



集詩
食後の唄

價定
¥1,80

著者 木下太一郎

發行者 久保田俊彦

印刷者 高木 西三

發行所
東京市麹町區下六番町二七番地
アラ、ギ 發行所
振替口座東京二八三四三番

發賣所
東京市神田區表神保町三番地
振替口座東京二七〇番
東京堂書店

發賣所
東京市神田區錦町三丁目八番地
振替口座東京四七二七二番
嶺雲堂書店

大正八年十二月十日發行
大正八年十二月七日印刷

裝幀 小糸源太郎

印刷 株式會社 秀英 舍

印刷 長榮舍印刷所

印刷 大江印刷株式會社

製本 小川由次郎

彫刻 五島徳次郎

